

ゆめ伴(とも)プロジェクトin門真 ～認知症になっても輝けるまちをめざして～

森 安美 ●ゆめ伴プロジェクトin門真実行委員会 総合プロデューサー(主任介護支援専門員、社会福祉士)



文通相手の高校生とオンライン交流会の様子

要旨

本団体では、これまでの認知症ケアの中心である医療のCure(治療)、介護のCare(ケア)だけではなく、認知症の人と地域の人とのCommunication(つながり・交流)に焦点をあてた取り組みを行うことで、認知症の人が輝ける地域社会の実現を目指している。

そのために、認知症の人が主役となり活躍できるカフェや畑など多様な活動を展開してきたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、直接的な交流を行う活動ができなくなった。

しかし、こんな時こそつながりを途切れさせずにはならないと、手作りマスクや折り鶴作り、文通やオンライン交流など、施設や在宅の場にいながら参加できる「ステイホーム型地域活動」を展開した。

その結果、コロナ禍で見出した「ステイホーム型地域活動」は、これまで介護度が高く移動が困難などの理由で、サロンやカフェなどの「集い型地域活動」に参加できなかった方が社会参加できる新たなスタイルであることがわかった。今後は「集い型」と組み合わせたハイブリッド型の地域活動を展開し、あらゆる状況の認知症の人が社会参加できる仕組みを構築していきたい。

1. 背景と目的

認知症になると地域社会とのつながりが急激に減少し、認知症の人が輝いて生きることが難しくなる現状がある。そのため、本団体では認知症の人が活躍できる場や活動を創出し、その活動を通じて地域の人とのつながりを生み出すことを目的とした活動を実践している。

2. 活動の方法

2020年度は新型コロナウイルス感染防止のため、直接的な交流は回避し、離れていても心でつながることのできる取り組みを展開した。

また、本団体は介護事業者や社協、行政、市民団体など多様な団体で構成しているが、さらに他団体とも積極的に連携しながら活動を実践した。

1) おばあちゃん達のテレワーク「夢かなえマスク」の製作

4月、マスクが不足する中、認知症の方と介護スタッフが一緒にマスクを作ってみたところ、手作りのあたたかみとともに、高齢者の優しさが伝わるマスクが完成。5カ所の介護事業所に声をかけて取り組み、それぞれの暮らしの場所(施設や自宅)で、それぞれのできることを分担し、まさにおばあちゃん達のテレワークが実現できた。完成した120枚のマスクは「夢かなえマスク」と称し、介護者家族の会に寄付をした。

2) 心を一つに「かどま折り鶴12万羽プロジェクト」の実施

緊急事態宣言下の5月、認知症の人や高齢者の地域社会とのつながりを途切れさせない



「夢かなえマスク」製作の様子 施設などでもたくさんさんの折り鶴を作成(かどま折り鶴12万羽プロジェクト)

ために、ステイホーム中の施設や自宅で折り鶴を作り、その折り鶴を集めて市民文化会館のホールに一つのアートにして展示するというプロジェクトを他の市民団体と共に実施。高齢者だけではなく多くの市民の共感を呼び、15万羽の折り鶴が集まり、6月にアートとして飾られ、町全体に大きな感動を生み出した。

3) 高校生と高齢者の交流「心でつながる文通プロジェクト」

5月、市内の高校生28名より「外出自粛で寂しい想いをしている高齢者を励ます手紙を書いたので届けてほしい」という依頼があり、施設の高齢者や一人暮らしの高齢者に手紙を届けて文通がスタート。お互い顔も知らないが、相手を思いやりながら手紙を書き、交流が深まった。9月にはZOOMを活用してご対面交流会を開催。コロナ禍でも世代間交流が実現できた。

4) おうちde笑おう!プロジェクト

緊急事態宣言中、ステイホーム中の要介護高齢者が笑顔になるきっかけを作るために、自宅で楽しめる3点セット(川柳作成用一筆箋、折り鶴作成用折り紙、綿花栽培用の種)をケアマネジャーなどが配布した。

5) 「おそとde笑おう!プロジェクト」

～畑でラジオ体操～

11月、外出自粛で筋力や認知機能の低下が懸念される高齢者のために、三密回避できるゆめ伴ファーム(畑)で、毎週水曜にラジオ体

操を実施。近所の高齢者や認知症の方も参加。同時に、高齢者施設とはZOOMでつなぎ、オンラインでのラジオ体操も実施した。

6) RUN伴+門真

～笑顔でつなごう!門真の輪～

毎年11月に、認知症の人や高齢者や市民など約200名が共に街を歩きゴールを目指すスポーツイベントを開催してきたが、今年度はそれぞれの場所で高齢者の笑顔の動画を撮影し、その動画をつないで1本の笑顔の動画として完成させた。

3. 現状の成果・考察

コロナ禍で従来の活動スタイルを変更せざるを得なかったが、結果として折り鶴やマスク作り、文通のように施設や自宅にいながら参加することができる「ステイホーム型地域活動」という新たなスタイルを見出すことができた。それによりサロンやカフェなどの従来の「集い型活動」に参加できていなかった、介護度が高く移動が困難な多くの高齢者が参加可能となった。

また、直接的な交流ができなくても、地域との一体感を感じられる取り組みであれば、つながりを実感することは可能であることがわかった。

4. 今後の展望

認知症になっても輝けるまちを実現するために、認知症の人が輝ける場を創るだけではなく、コロナ禍での実践から、認知症の人がそれぞれの暮らしの場いながら社会貢献して輝ける仕組みを構築していくことが、本団体の新たなミッションであると考えている。



おそとde笑おう!～畑でラジオ体操～の様子